The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	江戸時代の乗物 : 形と印象について
Author(s)	落合, 里麻
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

江戸時代の乗物
── 形と印象について

落合里麻／秋田公立美術大学

江戸時代に用いられた乗用具の一つに駕籠がある。居室部分を木の棒に吊るす構造の乗用具のことを駕籠と呼ぶが，その中でも大きく２つに分けられる。主に公家や武家などの支配者層が用いたとされる，つくりの良いものを「乗物」と呼び，被支配者層が用いた，簡略化されたつくりのものを「駕籠」と呼ぶ。駕籠の中に「乗物」と「駕籠」が存在するということだ。

乗物は今も日本各地に残されている。本シンポジウムの開催地である秋田県にも，複数の乗物が確認されている。秋田市泉三嶽根にある天徳寺では，乗物を４挺所蔵している。佐竹31代義睦公夫人の嫁入り駕籠１挺（図１），惣網代乗物１挺，莫蓙巻乗物２挺である。嫁入り駕籠以外の３挺は，先代の住職が登城などの際に使用したものと伝わっている。また，資料として展示されているものもある。秋田県立博物館には秋田藩士の家に伝来した乗物が，仙北市角館町の樺細工伝承館には佐竹北家の扇の紋入りの女乗物が展示されている。

「女乗物」とは，乗物の一種であり，身分の高い女性が使用したものを指す。男性が使用する乗物とは形状や外装が異なり，乗物の中では最も華やかな存在であった。ここからは，その女乗物について概説し，特徴的な部分について比較を交えながら見ていくこととする。

図１　天徳寺所蔵 佐竹31代義睦公夫人の嫁入り駕籠

女乗物の中にも様々な種類が存在し，さらに順位付けされていたため，当時の女性は好きなものに乗れるわけではなかった。最高位は黒漆金蒔絵女乗物，次いで天鵞絨（ビロード）巻女乗物，朱塗網代女乗物，青漆塗女乗物，莫蓙巻女乗物という順位であった。最高位が「金蒔絵」，最下位が「莫蓙巻」，言葉を聞いただけでもその差は想像に難くない。天徳寺の女乗物 佐竹31代義睦公夫人の嫁入り駕籠は漆塗りではあるものの，黒漆ではなく梨地仕上げの上に装飾がされる。比較的珍しい仕様で，黒漆金蒔絵女乗物に比べて数は少ないが，全国で数挺現存しているという。

女乗物は一見，どれも同じような姿かたちに見えるかもしれない。現存する女乗物６挺の正面図を並べて比較したところ，寸法差は小さく，比率も近いことがわかった。おそらく当時は形状や寸法に規定が存在していたのであろう。たとえば，『婚禮道具圖集』（1793年，岡田玉山 著）には女乗物の図が描かれ，尺貫法による寸法が記載されている。現存する女乗物と比較しても，寸法差は小さい。現代のような工場の量産品ではないので，形状・寸法ともに変えようと思えばいくらでも自由に変えることができたはずであるが，現存するものを見る限り，特異な形状や寸法のものはほとんど存在せず，皆同じようなフォルムに統一されていたようである。

女乗物は，つくりを活かした美しい装飾が特徴的である。（図２）は葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物（分類としては黒漆金蒔絵女乗物）である。内部の背面には松と鶴，後部側面には牡丹と鳥が美しく描かれる。一方，引戸の内側にあたる側面部分と前面の絵を比較すると，背面に比べて技量が劣るように感じられる。この比較からは，乗物本体だけでなく，内装の絵についても分業制で描かれていたことが推測できる。

図２　（公財）松浦史料博物館所蔵 葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物
左図：内部背面，右図：内部前面

屋根の裏側，つまり天井にあたる部分は格天井のように作られる。厚さ３mm 程度の薄板を骨組みの上に張ることで屋根の形が作られており，このような構造によって内側からは格天井のように見えるということだ。この一つ一つの区画に花の絵が描かれることが多く，構造を保つために生まれた形を上手にデザインの一部として活用していた例と言えよう。

女乗物の屋根は基本的に破風型であるが，この形状の屋根においては微妙なアールの違いで大きく印象が異なるということを，筆者は調査の過程で実感してきた。（図３）は女乗物２挺の正面（上部）である。この２挺は屋根の両端の上がり方に差があり，見た目の印象がだいぶ異なる。装飾によって印象は変わるものだが，やはり立体としての形の違いが，大きく全体の印象を左右しているように

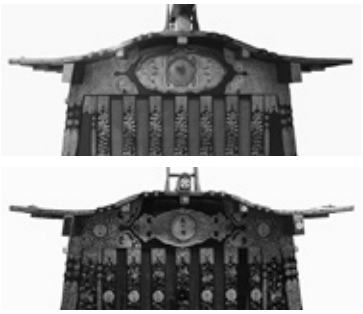

図３　正面図の比較
上図：（公財）松浦史料博物館所蔵 葉菊青山銭紋散花亀甲蒔絵女乗物
下図：もりおか歴史文化館所蔵 南部氏向鶴定紋散蒔絵女乗物

感じられる。人間に置き換えれば，少しの髪型の違いで印象が変化する感覚に近いのではないだろうか。乗物本体が似たようなフォルムで作られる中，屋根の形というのは最も個性が出る部分だったように思われる。

外装の蒔絵も見どころの一つである。竹菱葵牡丹紋散蒔絵女乗物（図４）では，金粉と銀粉を同時に使った，蒔き暈かしによるグラデーションが美しい。さらに蒔絵としては珍しい，擦れの表現が笹の葉に確認できる。このような技法を加えることで，蒔絵の表情には微妙な変化が生まれ，絵画的な印象も感じられる。

女乗物に代表される乗物では，内装・外装に関心が集まりがちだが，本体のつくりも併せて見ることで，形とデザインの関係性が見えてくる。さらに時代による変化や特徴について，今後も出来る限り現存する文献・現物資料を探し，解明していきたいと考えている。

図４　東京国立博物館所蔵　竹菱葵牡丹紋散蒔絵女乗物